

南宋行在会子の發展（下）

草 野

靖

目 次

はじめに

一 紹興行在会子（兌換券）の發行

I 会子發行の經過

II 会子の制度

III 会子發行の背景と目的

二 会子發行の増加と本錢問題

I 紹興末隆興年間の政情

II 隆興戸部会子都督府会子の發行と

度牒出売及び銅錢搜括（以上前号）

III 乾道歲計と会子増印及び淮南鉄錢

交子政策（以下本号）

IV 会子の收回

三 会子の再發行と新会子（不換券）

I 会子復印の經過

II 新会子（不換券）の發行とその制

度

むすび

III 乾道歲計と会子増印及び淮南鉄錢交子政策

会子の流通が悪化しても、南宋政府はその發行を止めることは出来なかつた。その事情は当時の歲計収支に良く示されている。宋会要食貨^五戸部の項に依つてみると、先づ乾道元年五月六日条に

南宋行在会子の發展

草野

臣僚言。竊聞。近者戸部當諸軍宣限之日而帑藏空乏。無可支散。遂致展移日限。旋行申請。而後僅解目前之急。其亦可謂迫矣。云々。

とあり、近頃戸部では、行在諸軍の宣限の日即ち給与支払日になつても錢財を用意出来ず止むなく期日を繰り延べて朝廷に財物の補助を申請し、これに依つて辛うじて目前の支払いを済ますと云う事態を生じていると述べられてゐるが、是歲十一月十六日、執政が朝廷より錢・銀を支降されたいと云う戸部の申請を進呈すると、孝宗は左藏南庫(36)の貯えも多くはないからと云つて戸部に「毎年合収支数目」の提出を命じ、その結果十一月十八日条に

執政進呈戸部毎年収支細数。到十月終。見管只四十二万緡。有二百八十余万未到。上曰。可督戸部。催促未到錢数。

とあり、また十二月十二日条に

宰執進呈戸部条具理財事件。上曰。戸部財計。朕見令監戸部人吏供具歲入名件数之。支遣之數每歲只欠三百余万緡。若行那移。亦可支遣得過。

とあるように、毎年三百余万緡の不足であつたことが明らかとなつてゐる。但しこれは中央政府戸部の収支である。全国的な収支ではもつと赤字が増えたかも知れない。先述隆興元年時の歳計が錢六百余万貫米九十余万石の赤字であつたと云うのがそれを予想させる。この戸部歳計の不足は、まづ次のようにして補填された。十二月六日条に

戸部侍郎李若川等言。通年入冬至次年四月。正係綱運稀少月分。以截日約度至歲終并十二月下旬合椿辦来年正

月上旬諸軍券食錢銀。指擬庫務見在及以後約收應副外。今具下頃。

一乞下都茶場。印降会子一百万貫。

一務場見在并州軍起到貼納塩錢一十余万貫。欲乞。令左藏庫取撥貼湊支遣。其日後統納并州軍起到貼納塩錢。亦乞聽本庫逐旋交跋。並理充務場拖下錢數。応接支遣。

一乞左藏南庫於見管錢銀内取撥五十万貫。

とあり、これが「並從之」とされている。貼納塩錢³⁶の額は極く僅かであり、結局会子一百万貫の印造と朝廷の貯備財である左藏南庫の錢銀五十万貫の支用で赤字が埋め合せられたと見て良い。但しこれは乾道元年十二月六日から翌二年正月十日までの一月余りの費用の補填である。翌年にはまた増印しなければならなかつた。朝野雜記甲集^{卷一}三司戸部沿革に

乾道初。孝宗嘗計戸部歲入之數。較之歲用。但闕三百万緡。元年十二月丁亥時會子初行。李侍郎若川因請增印二百万緡。二月然上半年尚闕五十万。上命左藏南庫。以銀・会中半与之。三月壬辰自是版曹歲借南庫錢百余万緡。因以為例。

とあり、乾道二年二月会子二百万貫を増印したが、なお戸部の歳計は五十万貫が不足するため、翌三月左藏南庫より錢銀中半で補填し、以後毎年南庫の銀・会百万貫が戸部の補助に充てられることになったと記している。なお右に「時・会・子・初・行」。李侍郎若川因請增印二百万緡」とある一節は如何にも会子がこの時始めて行使されたことを云うようであるが、これは同書・甲集^{卷一}東南会子によつてみると、宋朝の東南地域に於ける会子発行の沿革を、北宋大觀中に於ける交子試用から説き起して紹興六年の張浚の行在交子務設置に触れ、紹興三十一年の錢端礼の行在会

子發行を述べた後、

乾道初。戸部以財匱增印会子二百万緡。李侍郎若川因請。官兵廩給減支見錢。歲中可省緡錢二百四十万。上以

其動衆難之。二年二月辛未時。会子初行。軍中多以為不便。鎮江都統制郭振。与総領趙公称有隙。奏乞公称（公称二字衍字ならん）

易見緡付本軍。上以論輔臣。洪丞相曰。楮幣在処可行。但須得本錢称提乃可。遂命行之淮東。三月辛亥

と記しており、従つて「時会子初行」が、会子が初めて発行されたことを云うものでないことは明らかである。

「遂命行之淮東」の一節も、先きにみたように、隆興元年十月度陳亮田錢を本錢として会子二十万貫を淮東総領所の大軍費に充てており、また景定建康志四卷一建康表・乾道元年十二月十四日条に

詔。印造建康府二百・三百零会二十万貫。令權貨務差号簿官。逐旋管押前去交納。從淮西総領所請也。

とあり、乾道元年十二月建康府の「建康府会子務を兌換地と指定した」二百文・三百文額面の零会（小額会子）が淮西総領所に支給されているから、乾道二年三月に始めて淮東路に会子が発行されたことを云うものとも解し難い。また会子二百万貫の増印に應じてなされている李若川の奏請は、宋史全文統資治通鑑卷二乾道二年二月壬辰条に

進呈戸部措置。毎月官兵俸料。減支見錢分數。月中可省二十万緡。上曰。不若且依旧例。事稍動衆。不可輕改。

とある処から一層明らかのように、会子増印と共に官兵俸料の見錢品搭率を引下げ銅錢の支出を押えようというものであつた。会子の品搭分數はむしろ増加される傾勢にあつたわけである。「時に会子初めて行わるゝや」とは、増印二百万貫の会子が発行された当初の状態を云つたものと解される。

こうして歳計の欠乏それも官兵の俸料に使う銅銭の不足から会子の増印発行が避けられず、また本錢調達の実態からみて、その流通が決して良好でなかつたことが知られるが、この事態は一時抑えられていた淮南鉄錢策を再燃させることになった。宋会要・選舉八親試・乾道（二年AD一一六六）三月九日条に、集英殿に於いて礼部奏名特奏名進士に試せられた内出制策が記されているが、一節に

錢穀之間非不動而未能使国有積年之儲。屯田以實塞下。或謂兵不如農。改弊以贍邦用。或謂鉄不如楮。豈為之不得其要歟。抑文勝而弊難革歟。何視古之弗及也。

とある。これは洪适が作つたもので、彼の盤洲文集にも「乾道二年殿試策題」として収録されている（卷六）。当時貨幣問題の解決に楮（＝会子）の利用を主張する者と鉄錢政策をとろうとするものがあり、意見をたたかわせていたことが知られるが、先づ乾道二年六月淮南交子の発行が決められている。文献通考^{卷九}錢幣二淮交に

二年六月詔。別印二百・三百・五百・一貫交子三百万貫。止於兩淮州縣行使。其日前旧会。聽對換。應入納買。並交子見錢中半。

とあり、交子三百万貫を兩淮に限つて行使させること、旧会子はこの交子と對換回収することなどを決めた。尋いで宋史^{卷三}是歲八月辛未朔条には

詔。兩淮行鉄錢。銅錢毋過江北。

とあり、淮南に鉄錢を発行することが明らかにされ、江南の銅錢を將帶して長江を渡ることが禁せられた。そして淮南・江南間を往来する者に対しては、宋会要食貨二塩法乾道二年八月四日条に

戸部言。客販淮東袋塩。其塩倉合納指留塩本等錢。縁見錢不許渡江。依已降指揮。令客人將合納指留錢。就行在并建康府權貨務兌換淮南交子。前去請塩。云々。

とあり、また宋史^{三卷三}乾道二年八月癸未十三日条に

降会子・交子于鎮江・建康務場。令江淮之人対換。

とあるように、始め行在・建康府兩權貨務場で、尋いで建康・鎮江權貨務場で、交子・会子を相互に兌換できるように措置された。後の措置は、前出文献通考の後文などでは、交子・会子各二十万貫を兩務場に降付し淮人の江を渡る者江南の人の渡淮する者の対換に使用させたと詳記している。これで淮南路を鉄錢と鉄錢を本錢とする交子の行使地域に改編する措置が完了したわけである。

そしてこの措置と併行して江南では会子の使用量を縮少してゆく動きがあらわれている。先きに紹興三十一年七月乙未廿四日、淮浙・湖北・京西州軍に行在会子を行使したとき、諸州軍から中央政府に上供する錢は、不通水路州軍が全用会子解發、沿流州軍が錢・会中半の品搭解發とされていたが、宋会要食貨^{八四}水運・乾道二年六月四日条によると(食貨^{四四})(漕運参照)³⁷⁾

詔。諸路州軍起解錢綱。見以会子・見錢中半發納。訪聞。諸州軍却將人戸納到見錢。避免起綱脚剩。兌換会子起解。可遍下州軍。自今後。將応合起發錢綱。並以十分為率。權許用二分会子・八分見錢解發。從戸部請也。

とあり、淮南交子の發行が決定された乾道二年六月の四日、諸州軍官吏が、上供錢運送の費用を節約するため、税戸が銅錢を納めても現地これを会子に替え、会子を以つて中央に起發しているからと云う理由で—この現象は会

子普及の面からも検当されねばならぬ――⁽³⁸⁾錢・会中半制を罷め、二分会子・八分見錢の起發に改めている。尋いでまた十月五日になると(右同)

権戸部侍郎曾懷言。乞下諸路州軍。応起綱運。自來年正月。十分為率。一分会子九分見錢。内不通水路去処。

依旧起發銀兩。從之。先是諸州綱運。並要九分見錢銀・一分会子。懷恐。逐州銀兩不等以致折閱。因有是奏。

とあり、乾道三年正月以後は一分会子・九分見錢・起發但不通水路州軍は会子發行前の旧制に従つて輕齋銀起發、とするよう改めている。これは現行の九分見錢若しくは銀兩・一分会子の新制を銀兩の部分だけ改めたものであるが、ここにみえる九分見錢銀一分会子の品搭率は、恐らく是歳の秋税の徴収に當つて降されていたものであり、先の二分会子・八分見錢法は夏税の收納を対象としていたものであろう。こうして乾道二年の中に錢・会中半から錢九分・会子一分まで品搭率を引き下げられたが、この間七月には印造も止められていたようである(後述)。

江南に於ける会子行用の縮少には軍備の縮少が併行していた。紙面の余裕がないので詳述を避けるが、南宋政府は和議成立直後の隆興二年十二月壬寅招軍を罷めることを宣言してから軍備の縮少にとりかかり、一方では、殿前司・侍衛步軍司・侍衛馬軍司・鎮江都統司・建康都統司・池州都統司等の兵で淮南路諸州軍―淮東路楊・真・楚州高郵・盱眙・天長軍、淮西路濠・廬・和・舒・蘄州安豐・無為軍等―に屯戍する者の員数や更戍の法を整え、他方では兵員を揀汰している。兵員揀汰の動きは先きに表示した乾道内外大軍数の裁定月日からうかがわれた処であるが、尚例を挙げておくと、乾道二年四月乙酉、嘗つて御營司が招收し現在殿前司に収附されている弓手三千三百

人、殿前司が招収した養馬軍兵・輜重尖頭など一千四百人、馬軍司の効用軍兵一万六千三百人は、揀閲して強壯堪披帶の人のみ戰士に収付するようにと云う臣僚の奏が出され、殿前・馬・歩司及び在外諸統帥に軍籍の聞奏が命ぜられており、また十一月には、侍衛歩軍司公事の陳敏が、本司の兵二千余人を揀汰して歳費錢米約四十八万貫を節省したことを報じ、且つ諸軍兵士合計三十万人から一分の老弱を汰去すれば年間七百二十万貫の費用が省かれることになり国も富み兵も強くなろうと奏して容れられている。⁽⁴⁰⁾また江州都統司の廢止が企てられている。本司は紹興廿九年五月四日茶寇彈圧のために殿前司の兵千人が江州駐劄を命ぜられ、尋いで三十年五月八日、殿前・歩軍司の兵各三千人馬軍司及新招兵各二千人計一万人を以つて都統司が作られたのが始まりであるが、乾道二年十一月七日この兵（当時一万五千人）を元屬軍司に抽回させている。但しこれには異論が出て翌三年正月十日復置し、三月また抽回され、結局軍額の裁定は四年十一月四日まで持ち越されている。⁽⁴¹⁾鎮江都統制威方も本司の兵四千人を揀汰しているが、これも乾道二年中のことであらう。この動きは国用司の設置へ続くものである。宋史⁽⁴²⁾○⁽⁴³⁾李舜臣伝によると

中乾道二年進士第。時朝廷既罷兵。而為相者益不厭天下望。舜臣对策論。金人世讎無可和之義。宰輔大臣不当以奉行文字為職業。考官惡焉。絀下第。

とあるが、乾道二年初めの朝議の傾向を示す事件として興味がある。破綻した財政を建直すために奔走している処にこうした正論を吐かれるのは、考官ならずとも甚だ迷惑であつたろう。

以上、紹興末から乾道二年に到る間の南宋政府の紙幣通貨問題をたどつてみたが、この考察に依り、海陵王の南

侵政策に対抗して止むなく国防軍の強化を図り財政通貨（銅錢）欠乏の激化と云う事態に直面した南宋政府が、会子発行策をとつてこれを持ち切ろうとしたが、その後に行われた三次にわたる戦争が兌換準備を超えた会子の増発を誘致してしまつたため、和議成立後の政府は、同様に戦争が産んだ三百万貫の赤字財政、それも特に官兵俸支払に必要な銅錢絶対量の不足と云う難問を抱えながら濫発会子の処理に当らねばならなくなり、いろいろ苦心したが、結局淮南交子鉄錢策と銷兵策を併行することによつて政府の銅錢需要を緩和し江南会子を縮小させる道をたどり始めたことが確認されるだろう。七月には会子の印造が停止されていたが、この動きが会子廃用に向つていたことは明らかである。

IV 会子の収回

乾道二年六月における錢会中半制から錢会八・二分制へ、十月における錢会八・二分制から錢会九・一分制への、会子品搭分数の引下げはしかしやや先きを急ぎ過ぎた措置であり、民間に流通する会子の信用を動揺させたようである。朝野雜記・甲集^{卷一}東南会子の乾道二年三月辛亥の乾道会子發行に続く記述に

然楮券所出既多。而有司出納皆用見錢。民不以為便。陳天与良祐在諫院為上言之。

とあり、また宋史^{卷三八八}陳良祐字天与伝に

明道三年^(乾道)。除起居舍人兼樞中書舍人。遷起居郎。尋除右司諫。首言会子之弊。願捐内帑以舒細民之急。と記されている。品搭分数が引き下げられた結果、民間の会子が流通を阻害されていたことが知られよう。「細民⁽⁴³⁾

之急を舒べよ」とは流通の道をせめられて市価が低落した会子を抱えている庶民を救済することを云つたのであらう。こうして民間に流通する会子を一举に整理しようとして大規模な会子収買が行われる。朝野雜記の前掲後文に、直ぐ続いて

先是已增權貨務入納会子二分。⁽⁴⁴⁾上諭輔臣。不可失信于民。^{二年三月癸卯}三年遂出南庫錢二百万緡。收回所增会子。而命三衙全支銀錢。

とあり、また陳良祐伝の後文に

上曰。朕積財何用能散可也。慨然發内府白金数万兩。収換会子。収銅版勿造。軍民翕然。

と記されている。この收回は、三衙將兵の俸錢は会子の品搭を罷めてすべて銀錢で支払えとか、会子の銅版を收回して印造を禁じたとか、また右掲朝野雜記の後文に「始議[・]尽[・]収[・]之[・]」。已降内藏南庫銀各百万兩矣」と云うように、会子の廢絶を意図していたものであつた。

会子收回の指揮は乾道二年十一月九日に出されている。宋史^{卷三} 同日己酉条に

尽出内藏及南庫銀。以易会子。官司並以錢銀支遣。民間從便。兩淮總領所許自造会子。鬻諸路營田。

とあり、内藏庫及び左藏南庫の銀一切を放出して会子に換易すること、今後諸官司は会子の品搭支遣を罷め錢銀を支用すること、淮南交子は印造の權を兩淮總領所に委ねて、その存続使用を許すこと、⁽⁴⁵⁾營田を出售すること、を指示しており、また同日、宋会要食貨^八陸運・乾道二年十一月九日条^(食貨四四)漕運^(四四)参照に

詔。諸路州郡綱運。自指揮到日。並解發見錢。其自来不通水運去處。依旧解發輕齎。後因江東路申請。尋詔諸

路。自乾道三年為始。

とあり、諸路州軍の上供錢は以後見錢一色をもつて解發し會子を品搭しない、但し水運を通じない州郡は輕賚銀解發とすると云う指揮を發布している。兩淮交子が収回の対象から除かれているが、江南に於ける會子行使量の収縮が淮南に於ける交子鉄錢の行使と呼応して推し進められて来たこれまでのいきさつから見て当然の措置と云えよう。また諸路營田の売也會子収換に關聯した措置であつたようである。これは宋會要・食貨^{一六}一官田雜錄乾道二年十一月九日条に

權戶部侍郎曾懷言。諸路沒官戶絕田產已売到錢五百四十余萬貫。所有營田若便売。竊慮攤併。候沒官田產売畢。申朝廷接續売。

と云うように、これまで戶絶沒官田五百四十余萬貫相当を売つてきた處へ更に營田の売を加えたものであるが、右に續く十七日条でこの營田売の手續きをみると

戶部言。諸路營田。已降指揮。令常平司売。今欲行下逐路常平司。尽実開具頃畝。紐計実価。保明供申。從本部置籍拘催。所納価錢聽以金・銀依市価紐折。并許用會子。(中略)從之。仍令戶部侍郎曾懷專一提領。其錢起赴左藏南庫。令項椿管。

とあり、田価の支払いは金・銀に依る市価折納のほか會子の使用を許すこと、また売田錢は左藏南庫に送納することを指示している。売田錢の左藏南庫送納は、この乾道八年十一月六日の措画でも「其売到価錢。計綱起發赴行在。左藏南庫送納」とされているが、これは營田売を通じて會子を収回するとともに、売田錢によつて會子収

回到放出された南庫の錢銀を補填する狙いがあつたことを示すものであらう。

会子收回の実態は、先づ乾道三年正月に係る度支郎中唐瑑の上言にみられる。この上言は文献通考^{九卷}錢幣二会子に伝えられるものが最も正確であるが、これに依ると

度支郎中唐瑑言。自紹興三十一年至乾道二年七月。共印過会子二千八百余万道。止乾道二年十一月十四日以前。共支取過一千五百六十余万道。除在官司樁管循環外。其在民間者有九百八十万道。自十一月十四日以後措置收換截至三年正月六日。共繳進過一百一十八万九千余貫。尚有八百余万貫未收。大約每月收換不過六七十万。

とあり、先づ紹興三十一年(A.D.一一六一)から乾道二年(A.D.一一六六)七月迄の間に二千八百余万道が印造されたが――従つて会子の印造はこの七月で停止された筈である――その内一千五百六十余万道は既に乾道二年十一月十四日の換易開始以前に支取されており、残る処は總計一千二百四十余万道で、うち二百六十余万道が諸官司の庫藏に貯備され、九百八十万道が民間に流布する状態にあつたこと、換易開始から翌年正月六日頃迄の間に民間に流布するもの一百一十八万九千余貫を回収し――従つて月額平均六・七十万貫の回収となる――八百余万貫を残すまでに至つたことが分る。道と云うのは紙券類を数える助数詞であり、従つてこの数から錢額を判定することは出来ない。⁽⁴⁶⁾「支取」は先掲攬轡錄に伝える金国交鈔の印文にも「若赴庫支取。即時給付。每貫輸工墨錢十五文」と見えていたが、紙面の錢額を支払つて会子を收回することを指す。朝野雜記・甲集^{卷一}東南会子では

時会子已造者二千八百余万。已用者一千五百六十余万。而在民間者九百八十余万緡。

と記し、「支取」を「已用」と表現しているが、これは当時の会子が回流兌換とともに使用済みとして廃棄されたことを反映するものであろう。乾道二年十一月十四日の換易開始から翌年正月六日迄の回収額一百一十八万九千余貫は、換易の為に放出された資金「南庫錢二百万」(前)「内庫及南庫錢一百万両」(文獻通考卷九通)「出内庫銀二百万両。售於市。以錢易楮。焚棄之」(容齋三筆四官會折閱)に比して少ないようであるが、これには「官司並以錢銀支遣」と云う換易に伴う指揮に従つて官司に貯備されていた会子二百六十余万道が先づ錢銀と対易回収されたことを考慮しなければならぬ。実際の回収量はこの両者を合せたものであつた筈である。

会子の収換は三年正月以後もずっと続けられている。皇宋中興聖政卷四六乾道三年正月条に拠つて唐瑑の上言の後半をみると⁽⁴⁷⁾

今來諸路綱運。依近降旨揮。並要十分見錢。故州縣不許民戶輸納會子。致流轉不行。商賈低價收買。輻湊行在。所以六務支取擁併喧鬧。今欲。給降度牒及諸州助教帖各五千道。付權貨務召人。依見立價例。全以會子進納。庶幾少息擁併之弊。而會子在民間亦不過數月便可收足。

とあり、乾道二年十一月九日の指揮によつて上供錢の会子品搭解発が停められたため、州県でも税戸の会子輸納を受けなくなり、外路の会子は行用の場を失つてしまつたが、この情勢をみた商人達は安い値段で会子を買ひ込み行在に將來して兌換を請求し、そのため行在会子務六所の支払いが非常にとどこおつている、そこで度牒諸州助教帖各五千道を權貨務に降付し、会子一色でもつてこれを請買出来るようにし、兌換の渋滞を緩和すると共に会子収換を促進させて欲しいと述べている。この上言は朝廷に容れられて先づ取敢えず度牒助教帖各五百道が交付され、

無くなればまた引続き交付することにされている。度牒の価格は先きに述べたように毎道三百貫、助教帖は紹興三十一年六月四日で八百貫とされているから、⁽⁴⁸⁾兩者各五百道は四十五万貫に当る。収換財源も漸く乏しくなつて来ていたことが推測されるだろう。尚これで見ると、会子収換は行在の会子務だけで行われていたようであるが、韓元吉の南澗甲乙稿^{卷二}方公（諱滋）墓誌銘では、乾道元―八年の間にかけて

俄除敷文閣待制・知建康府。請。現錢五十万緡增置会子務。以安人情。上以出内府白金十万兩。付總領所。以爲稱提。

とあり、方滋が知建康府に任ぜられたとき、錢五十万貫を以つて会子務を増置し人情を安んぜんと請い、内庫銀十万兩を賜わつて会子の兌換に充てることを許されたと記している。方滋の知建康府就任は、宋会要選舉特恩除職には「乾道二年十月一日詔。右中大夫方滋除敷文閣待制知建康府」と記し、廿五史補編・南宋制撫年表（吳廷燮撰）では景定建康志に拠つて十一月七日より翌三年九月二日までの在任としている。十一月七日と云うのは実際に到任した月日であろう。従つてこの期間の或る時期建康府の淮西總領所に会子務若しくはこれに類する兌換場が開設されたこと、嘗つて建康府に置かれていた会子務はこれより先き既に廃止されたことが知られる。旧会子務廃止の措置は文献には伝えられないが、恐らく乾道二年六月の淮南交子発行の際になされたものとみられる。そして方滋が此処で会子務の増設を請うたのも、恐らく淮南交子の措置を考えていたのである。先きに述べたように、南宋政府は淮南交子の発行とともに、建康鎮江西樞貨務場に交子・会子各二十万貫を交付し、淮南・江南間を往来する商旅の交子会子対換に応じさせていたが、江南で行使される会子が收回されれば、自然この換易も出来なくなる

わけであり、そのまま放置しておけば淮南交子の信用を動搖させる。そこで建康府に兌換場を設け会子收回のあとをうめ合せたものであらう。この兌換は淮南交子を將帶して江南に入る商旅の要求に応じるものであつたとみられる。

会子の收回が罷められるのは、乾道三年六月である。文献通考^{九卷}錢幣二会子に

(乾道三年) 六月。戸部曾懷言。会子除收還外。有四百九十万貫在民間。乞存留行使。

とあり、朝野雜記・甲集^{六卷一}東南会子に

始議尽収之。已降内藏・南庫銀各百万兩矣。曾欽道為戸部侍郎。乞存留民間見在五百十九万。上從之。

とある。四百九十万貫と五百十九万と同じ奏言で数値が異つてゐるが、これは五百十九万が会子の道数を取り、四百九十万が錢額累計をとつたところから出来た相違と考えられる。衛涇の後集集^{五卷一}知福州日上廟堂論楮幣利害劄

子に依ると、この時の收回額を「換及七百余万」と伝えているが、乾道元年十一月十四日当時は官司に貯備されるもの二百六十余万道、民間に流布するもの九百八十万道であつたのであるから、先づ官司に在るものを回収し、更に七百余万に達するまで民間のものが回収されたとすると、大体五百十九万道に近い数値になる。然るべき根拠のある所伝と云えよう。

会子收回の動きは、淮南交子にまで及んで行われた。淮南交子は先きに述べたように、乾道二年十一月九日行在会子の収換が決められたときは、鎮江・建康府の両總領所に印造の權を委ねることになつたのであるが、文献通考^{九卷}錢幣二淮交に拠つてみると、淮南交子・鉄錢は共に江南への搬入を許されないため、商人の往來を阻害し淮南の

民を難渋させたので、右司諫陳良祐が淮南に銅鉄錢を併用して交子を廢罷することを説き、またこれに応じて乾道二年十二月癸酉四日、三省・侍從・台諫・兩淮漕司・郡守に意見が求められ（宋史本紀33）、この意見に従い翌年正月癸亥銅錢過江之禁が撤廢され（同上）交子が收回されることになった。二年十二月四日の詔勅に依じて奉られた意見の一つは、渭南文集卷三 朝議大夫張公（諱郊）墓誌銘にみる事が出来るが、それには

（出守儀省）俄詔兩淮郡守及部使者。各上用鉄券利害。公力言。券用於西蜀全盛之地。故能流転。然猶有弊。今兩淮凋瘵如此。諸郡賴以給用度者不過酒稅。新為戰場。無復土產可以貿易。独賴錢幣而已。若用券商賈且不行。何以為郡。

とあり、淮南交子の運用を誤つて商賈の往来が阻害されそれが淮南州軍の財政―此処は軍事的消費地帯である―に打撃を与えることが憂慮されている。諸方面の意見を綜括した中書門下省の意見も同様で

中書門下省言。昨來支降交子。付兩淮行使。緣所降數目過多。及銅錢并會子不許過江。是致民旅未便。今措

置。令銅錢・會子依旧任便行使。應官司見在未支交子。令差人管押赴在藏庫交納（皇宋中興祭政46乾道三年正月条）

と伝えられる。交子收回の手續きは、右に官司貯備の未支交子の措置を記す外、文献通考に「其民間交子。許作見錢納官」とあるが、民間に流布されたものは、行在會子とは異なり、今後年月をかけて徐々に回収してゆく方針ではなかつたかと推測される。

會子收回と並んで、財政收支の均衡を回復する努力も重ねられた。先きに一言した国用司の設置がそれである。本司の開設が決まつたのは、乾道二年十二月廿一日（宋史本紀）か翌廿二日（宋会要職官六国用司）で、宰相・執政がそれぞれ国

用使・同知国用事を兼任することになり、翌三年正月十一日に到つて、三省戸房国用司を置くことや本司に於いて管掌さるべき職務が定められている。本司を設置した狙いは、置司を宣した詔勅に量入為出がうたわれ、また置司の発端をなすものとして附記される臣僚の奏（前出隆興元年戸部收支奏）に「今戸部の内外一歳の收支は錢六百万緡・米九十万石が不足しているが、三衙・御營使司都督府は更に二十万もの軍兵の招集を図つており、兵・財が各々別処に管掌され統一して把握されないと、ところから来る弊害がみられる。現在宰相は樞密使を兼ねて兵を掌っているが、財用の実態をも周知して欲しい。また都督府は樞密使が領しているが、これも見今の戸部收支闕欠数目を知り、皆力を合せて無名無益の費を省き、軍籍の虚数を去り老弱を罷め、富国強兵の実を挙げて欲しい」と云う処から明らかなように、宰相・執政に兵・財を総轄させ、その強力な指導によつて財政の実態を厳しく検討し健全な収支体系を確立することに在つた。従つてその職務も、税収の侵欺・移用・拖欠を無くして収納すべきものを確実に拘催し、節約すべき処を節約するよう努力すると云うものであつた。例えば宋史全文統資治通鑑^{四卷二} 乾道三年二月壬申条に

上曰。朕已草得一指揮理會財用。少須降出御筆。云。自後宮禁內人并百官・將校・軍兵・諸司人。每月初五日。国用房開具前月支過已上五項請給数目并非泛支用。造冊進呈。便從此月為始。外路軍馬。可降式樣付諸路總領。逐月開具。自此遂為定式。

とあるのは、その活動の具体的なあらわれである。この指揮は乾道二年十二月甲申十五日參知政事となつた蔣芾の謝新除留身奏^{右同}に基いて出されたものであるが、これをみると終始節財を説いており、一節に

契勘在內諸軍。毎月逃亡事故常不下四百人。若權住招。一年半內可省三百八十万貫。俟財用稍足。可逐旋招収

強壯訓練而用之。不惟省費。又可兵精。因奏紹興以來初分五軍并内外諸軍分合添減之數。

とあり、これを聞いた孝宗が「蔣參政。理會財用。已尋見根源」と述べ、先きの指揮を降したと云う。依然として三百余万貫の赤字の処理が問題となつていたことが分る。本司の設置は、これが果してどれ程の財政的效果を挙げ得たか甚だ疑問ではあるが、ただ会子の收回が、紹興隆興時の中原回復策の反動として生れた財政緊縮化の基調に立つて強行されたものであることを知る上には見落せない事件であらう。

三 会子の再発行と新会子（不換券）

I 会子復印の経過

こうして南宋政府は乏しい財政の中から貴重な蓄財を放出して会子を收回したのであるが、この会子は、これまでに検討した処から明らかなように、財政通貨の不足特に官兵等の俸錢に支払う銅錢の絶対量の不足を補うために利用されたものであつた。このことは、当時の人々も良く認識していた処で、例えば宋会要・食貨^六金部・乾道六年二月五日条の臣寮の奏に、「比年以来、冶鑄不登。泉貨稀少。權以楮幣」とあり、また南宋呂祖謙の歷代制度詳説^七錢幣・詳説の一節にも「今日之所以為楮券又欲為鉄錢。其原在於錢少」と見えている。従つて会子が收回された後は、この通貨の欠乏を埋めるために何等かの措置がとらるべきであつた筈である。しかし南宋政府がこれに對処した様子は見えず、却つて江南に於ける会子行使量の收縮と併行して進められていた淮南鉄錢交子策も、会子收回とともに停止されてしまつた。会子の発行が再び要請されるに至るのは自然の成り行きと云えるだらう。南宋政

府は会子の收回を停めたその年の中に再び旧数の会子を発行している。

まづ乾道三年六月、先述したように未収会子四百九十万貫（五百十九万道）の存留使用が決定されていたが、尋いでまた、朝野雜記・甲集卷一六財賦・東南会子に

曾欽道為戸部侍郎。乞存民間見在者五百十九万。上從之。然銀直既低。軍士患其折閱。殿帥王琪因為執政言之。欽道復請以分数支会子。上不欲。魏丞相曰。今会子已非前日比。上乃許之。七月先是諫官陳天与嘗言。不可失信于民。乞復置会子五百万。十一月蔣參政行丞相事。力主之。其冬復印新会子五百万。十一月

とあるように、先づ殿前司の長官王琪の上言に依つて、七月己亥四日三衙將兵俸錢に対する会子の分数品搭が再開され、更に冬に入つて五百万貫が増印されている。殿帥王琪の奏は衛涇の後案集卷一五知福州上廟堂論楮幣利害劄子にも見えており、稍詳しく

（略上）緣既收上会子民間難得。銀価頓減。時王琪為殿帥。一再白廟堂言。銀価折閱。不免用殿司回易庫錢收買

軍人所請銀両。今錢已闕少。乞仍頒行会子以便軍民。

と記されている。会子を收回するに当つて、三衙將兵の俸錢を銀錢で支給するように改めたことは先きに述べたが、この銀両の市価が低落して俸銀の支給価格を下廻つたため、殿前司では、兵士達が俸銀を市中で両替して損失を受けることのないよう本司の回易庫に俸銀を収買させていたが、本庫の銅錢も乏しくなつたため、遂に会子の發行を請うているのである。銀価が低落したのは、会子の收回を通じて大量の銀が放出されたり、兵俸の支払いに会子の品搭が罷められてそれだけ銀両が増支されたりして、市中に出廻る銀の量が増えたことに由るものであろう。

この事件は銀両と銅錢や会子との流通關係を示すものとして改めて検討さるべき要素を含んでいるが、先づ会子を罷めては必要な通貨を調達出来ず、財政の運営に支障を来たしていたことが認められるだろう。尚「折闕」とは元価を割つて物価を売ることを意味し、⁽⁵¹⁾當時有価証券の転売などに就いて良く使われた言葉である。第二次の復印は蔣參政が丞相の職務を代行するに至つて為されたと云うが、參知政事蔣市が丞相（尚書左右僕射）を兼摂したのは、乾道三年十一月癸酉から翌年二月己亥までであり、⁽⁵²⁾この間の乾道三年十二月乙巳に繋けて、宋史本紀に「置豐儲倉。增印会子」とあり、また文献通考^{卷九}錢幣二会子に

（乾道三年）十二月。以民間会子有破損者。別造五百萬換給。他日又詔。損会貫百錢數可照者。並作上供錢解發。巨室以低價收者。坐罪。

とあり、是月民間に流布する損会^二破損会子に換給する為め五百萬貫を印造したと伝えられているから、この増印を言うものであることは間違いない。朝野雜記の日付は誤つている。そしてまた、本書が一見会子の増印を主張したかのように記している陳天与（諱良祐）についてその本伝を参照すると^(宋史卷三八八)会子收回の叙述^(前掲)に直ぐ続けて

未幾戸部得請改造五百萬。又奏。陛下号令在前。不能持半歲久以此令。民誰能信之。豈有不印交子五百萬遂不可為國乎。既而又欲造会子二千萬。屢爭之。不得。遂請以五百萬換旧会。俟通行漸收之。当使不越千萬之數。

とあり、逆に増印を押える意見を述べたように記している。恐らくこの記事をとるべきであろう。従つて会子復印の經過は、先づ乾道三年六月、未収会子四百九十萬貫の存留行使が許され、その後幾ばくもない七月己亥、主管殿前司公事王琪の上言により、三衙將兵の俸錢に対する会子の品搭支給が再開されて五百萬貫が印造され、またその

後ち二千万貫の増印が建築されたが、陳良祐等がこれを抑え、結局五百万貫を印造して先きに存留使用を許されていた旧会子四百九十万貫に換給し、全体として発行額が一千万貫を越えぬようにした、と云うように理解すべきであらう。乾道二年十一月十四日収換が始められたとき、会子は民間に在るもの九百八十万道、官司に椿管されるもの二百六十余万道、計一千二百四十余万道があつたと云うから、会子の收回は結局蓄財の徒費に終つてゐるわけである。尚「置豊儲倉。増印会子」と伝えられる十二月の会子増印が、豊儲倉の開設と直接関係していたかどうか問題であるが、この豊儲倉は、乾道三年六月九日から建設にかかり是歲十二月十二日に「豊儲倉」の名額を賜つた政府の新倉（二百万石倉）で、戸部の歳計米一百五十余万石―これは税米と和糴米とから成り、行在三倉即ち省倉上・中・下界の三倉に收納される―の外に、常時百万石近くを貯積して不時の支用に備えようとしたものであつた。そして本倉の貯米として三年七月廿三日から八十七万石が収糴されてゐるが、この中行在での収糴米三十万石の買付資金は、宋会要・食貨^{二六}京諸倉・乾道三年七月二十三日条に

詔。今歲後秋成。⁽⁴⁵⁾委行在和糴場官吏。於新置^(三)二百万石倉内。糴米二十万石。所有本錢撥省倉等処見錢・会子充。

若本錢不足。以經常窠名錢内貼支。

とあるように、省倉の見錢・会子や戸部の經常錢を取つて間に合わされていた。従つてこの買付資金は、いづれ財政に別枠を設けて用意さるべきものであつた筈であるが、これが会子の増印に求められたのではないかと見られる。陳良祐伝に見える戸部の二千万貫増印の建築がそれであらう。⁽⁵⁵⁾この事は会子増印の潜在的要求を示すものとして留意さるべきである。

こうして会子はたちまちまた一千万貫を再印されてしまった。翌乾道四年三月甲申には品搭支用の分野も拡大される。朝野雜記・甲集六卷一財賦・東南会子に

四年春。詔。諸軍諸司皆分数支会子。德寿宮依旧交見錢。(56)禁中亦分数交会子三月甲申

とあり、諸軍諸司及び禁中の支用に会子を品搭することになっている。

ところでこの時復印された会子は、既に旧会子とは性格が違っていたようである。同じくこの乾道三年中に復印された淮南交子や湖広会子（隆興元年A.D.一一六三年秋より鄂州の湖広総領所で発行された会子。襄陽方面に屯駐する大軍の俸錢に支払い、鄂州大軍庫で兌換される）と比較してみると、それが明らかである。即ち淮南交子は、宋史八卷一食貨志・会子に、旧交子收回の後に続けて

三年詔。造新交子一百三十万。付淮南漕司。分給州軍対換行使。不限以年。其運司見儲交子。先付南庫交収。とあるように、三年中に百三十万貫を印造し旧交子に対換して行使させており、交子收回後の淮南路の通貨需要を満たすと共に、旧交子の整理を急いでいたように見えるが、注意されるのは、「不限以年」の一句である。先述したように兌換券は回流兌換と共に廃棄されたのであるから、この兌換券を無期限に行使させると云うのはおかしい。淮南復印交子は明らかに不換券になっている。湖広会子については宋会要・職官四一総領所・乾道三年十一月二十三日条に

詔。令湖広総領所。印造新会子。通已未印造共三百七十万貫。将銅版。依已降指揮繳申尚書省。其旧会子逐旋繳納。

とあるように十一月に新会子を印造し旧会に換えているが、已発行未発行を併せて三百七十万貫で印造を打切らせている。若しこれが兌換券であれば、会子の廃棄を意図しない限り、印造の停止や銅版の回収は行い得ない筈である。恐らく淮南交子と同様な無期限行使の不換券であり、この措置に依つて湖北地方に於ける紙幣の流通額を三百七十万貫の線におさえたものとみられる。行在会子に就いては、三年十二月の増印の際に陳良祐が「以五百万換旧会。俟通行漸収之。当使不越千万之数」と述べ、この度びの増印会子五百万は先きに存留を許された旧会子の収換に充て、復印された会子が全体として一千万貫を越えないようにすべきであると提案しており、復印会子は回流兌換によつて流通額を減じてゆく旧会子と異なり、無期限行使となつていたことが推察される。南宋政府の紙幣は乾道三年の復印会子から不換券になつていたものと見ることが出来る⁽⁵⁷⁾。翌四年五月から発行された新会子は、この不換券が制度的に更に整えられたものと云える。

II 新会子（不換券）の発行とその制度

先づ文献通考^{九卷} 錢幣二 会子に

四年。以取到旧会毀抹截鑿。付会子局重造。三年立為一界。界以一千万貫為額。逐界造新換旧。差戸部尚書會懷。同共措置。鑄提領措置会子庫印。依左藏庫推賞。

とあり、先きに収回した旧会子を会子局に送付して新会子を印造するように命じ、且つ新会子は一界三年の行使期限を設けて界限が満ちた時次界の新会子に換給することとし、一界の印造額を一千万貫としている。一千万貫と云

う額は再印会子の數に拠つて定められたものであらう。会子の印造は会子務ではなく、新設の会子庫で為されている。本庫は乾道四年三月頃から設けられたようである。咸淳臨安志^{九卷}行在所錄・造会紙局に

在赤山之湖浜。先是造紙於徽州。既又於成都。乾道四年三月。以蜀遠紙弗給。詔。即臨安府置局。從提領官權兵部侍郎陳弥作之請也。始局在九曲池。後徙今處。

とあり、造会紙局が臨安府に置かれたこと及び提領官陳弥作の名が見えている。そして九月十一日になると官制的にも整えられ^(朱会要職官)
^(五七俸祿)

戸部狀。准批下提領会子庫申。契勘。近承指揮。差右迪功郎方伯達。監会子庫。填創置閑。^(關)所有請給等。本部看詳。欲乞。依見任打套局監官則例。支破会子庫添給食錢一十五貫文。從之。

とあるように、会子庫監官を創置して給与の額も定め、また六年閏五月十九日には「詔会子庫監官。令戸部長貳通舉⁽⁵⁹⁾」^(朱会要選舉)
^(三〇舉官)と、監官を戸部に所屬させている。新旧界会子換給の方法は、文獻通考の後文に詳しく

其年四月一日興工印造。至歲終可造一千万貫。措置收換旧会。^(A)每道收糜費錢二十足。零百半之。応旧会破損。

但貫百字存印文可驗者即与兌換。^(B)内有假偽。将弁驗人吏送所司。其監官取朝廷指揮。每驗出一貫偽会。追究元收兌会子人。錢三貫与弁驗人。如官吏用心。訖事無假偽。具姓名推賞。^(D)自十二月一日始置局收換。至明年三月十日終尽絶。更不行用。

とあり、新界会子は收換の歳の四月一日から印造を始めて是歳の末までに一千万貫を印造する^(A)、收換は十二月一日から始め翌年三月十日迄で終了させこの後旧界会子の使用を認めない^(D)、新旧換給の際、会子一道につき二十文

足の糜費錢を徴収する、但し零百会子即ち五百・三百・二百文等のものは半額の十文足とする(B)、換給は弁驗の人吏に当らせ、偽会一貫を収兌若しくは驗出する毎に、三貫の錢を追徴賞与する(C)ことにしている。弁驗人吏は、金国の例でみると、金史^{卷四}食貨三錢幣の泰和七年(A.D.一二〇七)七月の勅に「所司。籍弁鈔人。以防偽冒」と云い、また戸部尚書高汝礪の言に「府州県鎮。宜各籍弁鈔人。給以糸印。聽與人弁驗。隨貫量給二錢。貫例雖多。六錢即止」とあり、または歲十月の汝礪の言に「隨処州府庫内。各有弁鈔庫子。鈔雖弊。不偽亦可收納」とある。書券類の鑑識に熟達した者が当てられたものと見られる。界制運用の実態を知るには別に考証を必要とするが、今その結果だけ示すと、朝野雜記・東南会子に

五年春。遂詔。以一千万緡為一界。時欽道已遷版書。而陳季若以兵部侍郎提領。共奏。乞如川錢引例。兩界相沓行。始許之^{正月辛酉}

とあるように、乾道五年正月辛酉、兩界二千万貫沓行とされ、左記の如く運用されている。

乾道四年	七年	淳熙元年	四年	七年	十年
第一界会子					
第三界会子					
第三界展限					
第五界会子					
第二界会子					
第四界展限					

〔略 下〕

新印会子の発行は四年五月頃であつたように見える。南宋の人呉泳の鶴林集^{五卷}一進御故実・乾淳講論会子五事の第一に^(文献通考参照)

南宋行在会子の發展 草野

乾道四年五月四日。上宣諭宰執曰。朕昨疑。会子三・二年後鑿併。必不通快。卿等有救之之術否。王炎奏曰。会子行之既広。自然通快。蔣芾奏曰。今以会子收錢銀。若会子稍多。便出錢銀以收之。如此所謂行權。陳俊卿奏曰。斂散抑揚之道。權在於上。則無弊矣。上曰然。

とあり、五月四日廟堂に於いて、会子流通が渋滞した時の対策が論じられ、孝宗朝の紙幣政策の特色となる金銀買会策―会子が市中に累積されて渋滞し市価が低落したら、その都度金銀を放出して会子を収買し市価の持直しを謀るもの―⁽⁶⁰⁾が出されていたが、この翌日の五月五日詔勅に依つて会子行用の細則が指示されている。慶元条法事類にその三条が収録されているが、先づ賦役門・受納稅租・隨勅申明・詐偽の項に収められるものでは

諸路監司州県守(令^脱)処起解官錢。及人戸応干輸納稅賦并諸色人僧道合納諸色官錢。以会子見錢対半送納。其会子並免收水腳磨費工墨錢。及不得巧作名目抑令別納官錢。其間有些小損動不礙貫百字号。亦抑交收。不得非理邀阻。

とあり、県から州へ、州から本路の監司へ、若しくは州・監司から中央政府へ解発される官錢、及び税戸僧道等が州県へ輸納する官錢は一切見錢・会子の中半品搭とし、且つその際、水脚錢(税を上級機関に上納する際の運送費)磨費錢(頭子錢とか耗の類いであろう)会子工墨錢及び其他一切の名目の錢を貼納させないこと、破損会子も錢貫数や会子の字号が明らかな限りこれを收納し官司は妄りに輸納を拒否してはならないこと等租税と会子との關係が規定されている。次に雜門・雜犯・隨勅申明・詐偽には二つの事項を規定した勅が見えている。第一は

諸路州県。不得於会子内添用印指定行使去処。如違許人告。

である。これは後文に「本所照得。乾道四年五月五日指揮内一項。諸路州県不得於会子内添用印指定行使去処。如違許人告。今照得。別無給賞之文。兼是係州・県・違戾。止合許人陳訴。今声說存留照用」と云うように、州県官司を対象にした禁令である。この禁令が何を意味していたのか、残念ながら確認出来ないが、これまで会子に就いてみられた「添用印指定行使去処」に類する措置を考えると、先づ乾道元年淮南会子に背印を押して行使地を本路州軍に限定していたが、これは中央尚書戸部が行った措置であり、州県庁がこうした規制を加えることは出来ないし、また無意味でもある。次ぎは同じく乾道元年、常平司の銅錢一百万貫が拘收された時戸部が降付した会子には、「不許支用」「許充糶本」の旨が批鑿されていたが、こうした規制であれば、例えば「夏秋税に納むるを許す」とか云った指定をしてそれ以外に人戸が行使するのを拒否することなど有り得たと考えられる。しかしこの種の官吏の不正行為に対する禁令は、後年の例では前出の品搭規定の中に含まれている。例えば慶元条法事類^{卷六}財用門・錢会中半・隨勅申明・廩庫の乾道七年六月十八日勅の輪納分数の嚴守を命じた一節では

今後並依分数行使。如收邀難。許經朝省越訴。以違制論。

とあり、乾道九年正月二十九日勅の一項では

諸路州県^ト民張輪納稅賦諸色官錢。並用錢会中半送納。如受納官司違戾。許納人越訴。当職官以違制論。公吏邀阻乞寬。並行編配。

とある。「指定行使去処」と表現されるものとは少し異なるようである。第三に、旧会子は皆兌換券であり、行在に会子務六所を設け、また時に建康府にも増設され、或は諸路帥府に会子庫が置かれ、会子紙面には「就某処兌換」

と明記されていたのであるが、新印会子は、今述べたように界限を終えたとき始めて次界の新会子に換給されており、会子務などの兌換地を置いた形跡が全然認められず、また衛涇の後樂集^{五卷一}知福州日上廟堂論楮幣利害劉子によれば

孝宗一旦宣諭宰執。尽發内帑錢銀。置場收換。特降御筆。日下罷会子務。尽廢官吏。換及七百余万。民間反思得会子。

とあり、会子務は乾道二・三年の收回と共に廢止されたと伝えている。従つて竜図陳公文集・林公行狀に「今（嘉定七年）無務之可開。無錢可兌。亦無籍之可銷」と云うような、会子務もなく、兌換準備もなく、合同勘合簿もない会子、即ち不換紙幣は乾道四年の新印会子に於いて既に始まつていたと見られるのであるが、この兌換地の記載が会子面から消えたことは、旧会子になじんでいた商賈庶民にとつては重大な事件であつたろう。「指定行使去処」の禁は或は新会子を支用する際、州県官司が会子の信用を増す為めに、或は旧会子に似せて偽りの兌換地を書き込んだり、或は唯本州県内における流通を良くしようとする善意から独自に兌換設備を整えたりして、それが新会子の趣旨を害いその流通を混乱させることのないように、政府が予め対処して出した禁令であつたかも知れない。行使地指定の禁に並ぶものは

行使会子。不得邀阻減剋。如有違戾。許諸色人於所在陳告。每名追賞錢五十貫。犯人從重斷罪追賞。

と云うもので、会子の使用を拒んだり、或は額面の価格を割つて引き渡すことを要求したりするのを禁じている。これは官吏にも一般庶民にも適用されたもので、同じく雜門の出挙債負・随勅申明・詐偽に

民間拳質及還欠負錢。其会子正行使用。不得減退百數。

とあるものと対を為す禁令であらう。これに似た禁令は、嘗つて見錢関子にも見られ、慶元条法事類^{卷三}庫務門・

糴買糧草・隨勅申明・詐偽・紹興六年(AD 一一三六)十月二十一日勅に

應給降過糴本関子。聽民間從便使用。即不得輒有減落。如有妄說事端賤價兌買之人。立賞錢五百貫。許諸色人告。其犯人取旨從重斷罪。

とあり、一見会子の行使規定そのままであるかのように見えるが、この関子の規定は、関子を取引の支払いに使用するかしないかは当事者の便宜であり、唯だ妄りに言辭を設けて額面價格以下に抑えて受領する(減落・賤價兌買)ことだけが禁ぜられており、この点で会子の行使規制と異なっていることが見落されてはならぬ。会子の規定には減落價錢の外に「邀阻」の禁が加わり正行使用が要求されている。乾道四年五月五日以降に於ける庶民の会子使用に関する規制をみると、宋会要・食貨^{四六}上供・乾道七年正月二十日条に、錢会七・三分制を公示して

詔。自今後。諸路州軍起發上供諸色窠名銅錢。並要起七分見錢三分会子。并人戶典売田宅等交易用錢会子。使^(便)聽從民便。

とあり、また慶元条法事類^{卷三}財用門・錢会中半・隨勅申明・廩庫の錢会中半制を指示した乾道九年正月一十九日^{(三)?}勅の一項では

官私買賣交易。並聽從便。不拘錢会分数。

とあり、民間の取引きは品搭分数の規制を免れ当事者の便宜に従うと云う制度が乾道七年正月二十日から始まつて

いる。従つて、これ等と比較してみると、乾道四年五月五日勅の邀阻減剋の禁は、規定の品搭分数即ち錢会中半の枠の中で会子を支用する者はこれを拒否してはならずまた額面錢額を割つて行用してはならないと云う紙幣使用の強制が、民間の取引きにまで及んでいたことを示すものと云えよう。尚この規定は、文献通考^{九卷}錢幣二会子に依ると、紹興三十二年条に續けて、会紙抄造地、会子行使地、品搭法を述べた後ち

(略上)

其沿流州軍錢会中半。民間典売田宅牛蓄車船等如之。或全用会子者聽。

とあり、如何にも紹興年間から存在していたかのように記されているが、しかし良く見ると、この錢会中半に関する規定は、先述した紹興三十一年七月廿四日の勅そのままであり、またこの錢会中半の前に「当時会紙取於徽州。統造於成都。又造於臨安府」と記す臨安府の会子紙抄造は乾道四年三月以降に始まるものである。明らかにこの部分は会子の制度を概論したもので紹興三十二年にのみ係るものではない。文献通考の会子の項には右の記事を除いて品搭法に関する措置を伝えていないが、それはこの部分の叙述に依つて会子の品搭制度が代表的に説明されているからであらう。民間取引きに於ける会子使用の規制は、乾道四年五月五日勅に依る措置が採録されているものと見ることが出来る。⁶⁾ そもそもまた使用強制は不換券となつて始めて必要とされる規制であるとも言えるだろう。新印会子に関する規制は、最後に、文献通考・会子の乾道四年条に係る記事の中から

其將帶經過務場。不得收稅。

とあるのを挙げる事が出来る。これは旅行者が携帯する会子は商税の賦課を免除すると云うもので、商人の会子利用を奨励する意図に出た措置と云えよう。当時、銅錢は商税の賦課を免ぜられていたが(但し違法賦課多し)、

銀兩は、茶塩鈔の算請に使用するものとして特に免税手形を交付されたもの以外は、課税を受けていた。従つてこの措置は確かに会子の利用を有利にするものであつたと云える。⁽⁸²⁾

そこで乾道四年の新会子に就いて確認されたことを要約しながら、旧会子と比較しておく、(1)旧会子は兌換券であるが、新会子は不換券である。従つて旧会子には会子務が兌換機関として附設されていたが、新会子にはこれがない。(2)旧会子は兌換收回と共に使用済みとして破毀され、唯一回きりの流通で生命を終えるものであつたが、新会子には行使期間として界限が与えられ、この期間中支出・収納を繰り返して利用され、界限満了と共に次界の新会子と換給された。従つて新会子は旧会子に比して印造発行の負担が大幅に節約され大量使用が容易になつたと見られる。(3)旧会子は「隆興尚書戸部官印会子」などのように年号を附して呼ばれたが、新会子は「第一界会子」「第二界会子」の如く界次数を冠して呼ばれる。(4)新会子は発行数に定額が設けられ、一界一千万貫兩界を併用して二千万貫を限度とされた。これは兌換準備から解放された会子を濫発から守り、また収支運用の用途ともなつたとみられる。(5)新会子には遼阻・減剋を禁ずる嚴重な使用強制が伴つており、所定の品搭分数(＝錢会中半)を超えないかぎり受納を拒否することは出来ず、また額面金額を割つて行使することも許されなかつた。そしてこの強制は官錢の輸納起解のみならず民間の交易にまで及んでいた。但し民間の交易に対する強制は乾道七年正月二十日に撤廃される。と云えるだろう。要するに不換券となつて界制を施行されたことが顯著な変化であつたと云える。乾道四年五月三日には北宋以来慣用されてきた見錢関子の廃止が決められているが、恐らくこれは会子の不換券化に呼応した措置であろう。宋会要・食貨^四市糴糧草同日条に

戸部言。朝廷毎給降見錢関子・末茶引・度牒・乳香。品搭錢銀。下江浙州軍和糴米斛。訪問。多不遵元降指揮置場和糴。却於民間科敷收糴。実為搔擾。理合別行措置。今更不給降度牒関引。欲改降新印会子。品搭錢銀。云々。

とあり、今後和糴本錢には見錢関子・茶引・度牒・乳香等を支降せず、替りに会子を支用することになっている。関引・度牒類の給降を罷めた理由は「不遵元降指揮置場和糴」、即ちこれ等の関引・度牒類は和糴開始前に発売して見錢に変転しその見錢を和糴本錢に充つべきであるのに官吏がこれに従わず、関引・度牒類をそのまま民に科敷して強制收糴しているからこの弊害を除くと云うのであるが、関引・度牒類の使用に伴うこうした弊害は早くから見られた処であり、また紹興三十一年以後は会子が発行されているのであるから、この弊害を除く為めならば、もつと早く会子が使用され関引類が罷められて然るべきである。此処に挙げられる理由は、特に乾道四年五月三日と云う時点に於ける関引類廃用の説明としては不充分である。恐らくこの措置―特に見錢関子の廃止―がとられた理由は、会子が既に不換券に改められたため、この会子と見錢関子（地方州軍振出・中央権貨務支払いの為替手形）を併用するのが如何にも不自然となり、この両者が競い合つて新会子の信用が動揺するのではないかと案じられ、その為め関子を廃して会子一色とし、併せて抑配の弊害をも絶とうとしたものであろう。（見錢関子廃止の背景には茶引専売の問題もからんでいるが、これは別な機会に論じる）

本稿において論述した処から要旨を再述してむすびに代えよう。南宋政府は海陵王の南侵政策に対抗して国防を強化したが、これは直ちに財政の規模を拡大させ、もともと慢性的に潜在していた通貨（銅錢）の欠乏を激化させることになった。銅錢の欠乏に応じて、政府はこれまでも鑄錢事業の振興を謀つて銅材の確保に努め、或は廃坑を再掘したり、或は民間の銅器使用を禁じてその供出を命じ、また銅材の配買を行い、更には銅錢蓄藏の禁令を布告したりしていたが、何れも効果を収めることは出来なかつた。そこでこの危機を乗り切るために執られたのが紙幣「行在会子」の発行である。会子の発行は紹興三十年（AD 一一六〇）六月から準備され、暫らく行在臨安府で印造試用された後、翌三十一年二月愈々中央政府戸部の手に移管された。この会子は民間の寄附兌便錢会子をまねたもので兌換券であり、兌換機関として会子務（或は場とも称す）が附設されていた。銅錢需給の逼迫を寛和するために兌換券を発行したに就いてはそれなりの理由があつた。当時既に信用貨幣の運動と兌換準備との關係に就いてはつきりした認識が得られており、この關係を意識的に利用し、少ない銅錢を本錢として多くの紙券を運用し多量の通貨を造成しようとする意図が働いていたことを見落してはならぬ。

しかしこの期待は、その後が続いた戦争によつて六百万貫の赤字支出が要求されるに至り、およそはかないものとなつてしまつた。政府は官田を売り、官告度牒類の大量出売を強行し、或は一般会計とは別枠の常平錢を流用したりして、増発された会子の兌換準備に奔走しなければならなかつた。戦争終結後も尚三百万貫の赤字財政を抱えその補填を会子増印に頼らねばならぬ形勢に在つたが、政府は辺面淮南路に鉄錢及び鉄錢交子を発行して此処の銅錢を收回し、同時に軍備を縮少し、これに依つて銅錢の財政需要を緩和しながら会子の行使量を収縮することに努

め、遂に乾道二・三年の交、貴重な朝廷の蓄財を大量に放出して市中に渋滞する会子を一举に回収しようと試みた。このあたりの動きは、南宋政府の通貨需給の実状と会子発行との関係を如実に示し、また鉄錢政策の真の意図が何処に在ったかを暴露するものとして注意されよう。鉄錢を発行するのは銅錢の国外流出を防ぐものであると時人も公言しているが、これはしかし、特定の地域だけに悪貨を行使させることの不公平さに対する論難をかわす為めの理由付けにすぎぬものであろう。真の理由は財政問題に在ったのである。

会子が回収された後は、替つて銀の使用が試みられたが、これには両替の際の折閲が問題となり、また会子を罷めて別途に通貨を調達する目緒もつかず、再び会子が発行された。しかし此処で復印された会子は最早紹興以来のものとは異つて兌換を罷められた無期限行使の紙幣となつており、会子務も置かれなかつた。この会子は乾道四年（AD 一一六八）五月界制なども含めて制度的な外形を整えられ、これが以後南宋末年まで踏襲されている。⁽⁶³⁾南宋政府はここで始めて銅錢の準備から解放され紙幣を利用出来るようになったのである。

兌換を停止された紙幣がどうして価格を保証されたかと云う問題に就いては、嘗つて一部の問題に就いて論及したことがあり、⁽⁶⁴⁾尚稿を改めて詳論するつもりであるから、今は本稿中に論及した品搭制度を想起するに止めておく。兌換を建前とする旧会子も決して兌換のみに依つて流通力を賦与されていたのではない。同時に租税の輸納や専売品購入の支払いに会子を品搭することが許されており、且つその品搭分数は、錢会中半、八・二、九・一、中半と会子の行使量に応じて変化していた。旧会子の市価は兌換と品搭と両々相まつて維持されていたと云える。新会子はこのうちの兌換が除かれ政府の銅錢準備の労が省かれたものと見る事が出来よう。⁽⁶⁵⁾（完）（東洋文庫研究生）

註

(35) 内蔵庫系統の庫藏で戸部の管理からはずされていた。南宋の国庫制度は何れ紙幣の管理問題に関連して所見を述べる。

(36) 専売塩を購入する商人が塩場若しくは支塩倉で塩を受けるるとき納めるもの。塩本錢運塩水脚錢袋本錢等々を指す。宝慶四明志^六叙賦下塩課参照。尚塩の専売については「南宋時代の淮浙塩鈔法」と題して私見を述べたことがあるが(史淵八六輯) 不十分な点や誤りがあるのでいづれ補正したい。

(37) 繫年が混乱しているので注意を要する。食貨^二塩法乾道二年六月十一日条参照。

(38) 品搭制度の推移に就いては、別稿を組んでいる。紙幣の運用管理の問題に関連して所見を述べるつもりでいる。

(39) 宋史全文統資治通鑑^四卷二

(40) 註39に同じ。

(41) 以上要録及宋会要兵五屯戌、同^九備辺、また先掲乾道内外大軍表参照。

(42) 宋史全文統資治通鑑^四卷二 乾道三年二月壬申条、及び先掲大軍表参照。鎮江都統制戚方の名は、宋史本紀乾道二年七月甲寅、三年二月丙戌、六月甲申条等にみえている。

(43) この奏は乾道二年八月以降に係るものとみられる。

陳

南宋行在会子の發展 草野

良祐は、宋会要食貨^四市衆粮草乾道二年六月廿八日条に「起居舍人陳良祐」とあり同^七賦稅雜錄是歲八月九日条に「右諫議大夫」とあり、同^六錫放・是歲十二月廿一日条に「在司諫」として出ている。勿論列伝の繫年は誤りである。

(44) これに照応する文献は、宋会要・食貨^七塩法乾道二年六月十一日条の他に見当らぬ。この紀年の注記も問題がある。

(45) 明年正月には淮南交子の收回が行われるから、この措置の実施の程は疑はしい。

(46) 加藤前出「南宋初期における見銭関子と交子及び会子」では「九百八十万道」は後出朝野雜記の綴が正しいとするが従い難い。九百八十万貫から一百一十八万九千余貫を回収した残りを八百余万貫というのはおかしい。尚後述乾道三年六月の存留会子「四百九十万貫」と「五百九十万」の違いを見よ。

(47) 上言の後半部は皇宋中興聖政などの方が正確に伝えられる。

(48) 宋会要職官^五進納官紹興三十一年六月四日条に拠る。

(49) 註18参照。

(50) 会子・銀の流通関係は加藤「南宋時代に於ける銀の流通」に考説がある。

(51) 南宋の人陳叔方の頤川小語卷下では「俗語皆來処。語本常談二書詳矣。折閱二字蓋出荀子。閱者売也」とあり、また書叙指南^{七卷}「買売交易に「損所閱売物価。曰折閱」とあり李化德主編最新漢英大辞典では to sell bellow cost or at a loss と訳している。

(52) 宋史孝宗紀参照。

(53) 兩処に「十一月己酉」と注記されるのは疑問であらう。陳垣廿史朔閏表に依れば、十一月の朔日は乙丑とする。己酉は是月でない筈である。

(54) 以上、宋会要食貨^六京諸倉、孝宗紀、食貨^四市余粮草乾道三年七月廿三日条、等々を参照。

(55) 南宋会子の流通管理に関して收支の部面からも検当せねばならぬ。その際は和余と会子との関係も、もつとはつきり出来よう。

(56) 南宋初代の皇帝高宗の讓位後の退処地。

(57) 曾我部前出「南宋の紙幣」では、「同年七月再び会子を頒行し始め、会子務を復し、十二月云々」と説かれるが、会子務復活の典拠は示されない。

(58) 「填創置闕」に関連する表現を要録から拾うと、「創置置闕」「填復置闕」「創置置闕」「創置置闕」などと見えている。「創置置闕に填す」とは、官制上にボストを新設することであらう。

(59) 会子庫の管理を何処に帰属させるか相当論議されたようである。員興宗の九華集^{卷二}「上虞丞相書に

近日宰執爭權貨務。関子会子事堅臥不出。此事雖草草。然是人略有虚名。前日与子淵説。先生略加典折甚善。見説皆一二販者作之使然。況関子会子利害卓然。若朝廷則版曹平日為無策。前後手足俱露。万一有緩急。則誰受其害者。此与臨邛塩関子大意略同。況諸司告病已久乎。云々。

とある。此処に虞丞相と云うのは勿論虞允文を指すのであらう。權貨務都茶場の収入は尚書戸部に所属したこともあったが、組織的に切離された期間のほうが永いようである。筆者が現在まで確認した処では、建炎三年から紹興七年までと、乾道六年十二月十三日以降とは、戸部に管隸されず、宰相執政即ち廟堂に所属されている。紹興会子務が都茶場に、従つて戸部に、所属していたことは先きに述べた処である。ところが此処では「提領会子庫」の官がおかれ、会子の印造発行は戸部とは別系統の組織で為されているわけである。これは紙幣の発行が放漫に流れるのを防ぐには効果があつても、財政全般の運営の中で紙幣問題を処理しようと云う立場からすれば異論があつたこととみられる。尚註11の「主管都茶場会子庫」とか「行在会子庫」とか云う違いも管理問題を関連させて考えねばならぬと思

う。

(60) この考えは文献通考^九錢幣二会子の末尾に

高宗因論四川交子。最善沈該称提之說。謂官中嘗有錢百萬緡。如交子恤減。即官用錢自買。方得無弊。

と記されている。これは要録^七卷一紹興廿六年(A.D. 一一五六)

二月乙亥三月条にも記されるが、通考の方が表現が明確であるのでこれを示した。孝宗時代の紙幣策はこうした考えが受けつがれたものと見られる。

(61) 加藤前出「南宋初期に於ける見錢関子と交子及び会子」は、これを紹興三十一年七月乙未勅の一節とみるが、従い難い。

(62) この点に就いては、加藤前出「南宋時代に於ける銀の流通云々」の「八銀と会子」に論及されているので参照されたい。銀と会子との関係は筆者も専稿を組んで評論するつもりである。

(63) 会子の起源に触れた宋人の議論の中に、乾道四年に会子が始まるかのように説くものがあるが、それはこの事実の反映であらう。例を挙げると、先ず衛湜の後集^{卷一}知福州日上廟堂論楮幣利害劄子(嘉定十年)に

其後紹興末年。因軍興復置交子務。体倣民間寄附会子。印造官会。張官置吏。論建漸広。至乾道間。遂決行之。とあり、山堂羣書考索^{卷二}後集^{卷五}財用門楮に

南宋行在会子の發展 草野

紹興之三十二年都茶場始置務。乾道四之年而会子始行用。とあり王邁の隴軒集^{卷一}乙未(端平二年)館職策に

紹興・隆興間。世未知用楮也。其時国計初不見匱欠。民生亦無所苦。自楮幣行。於今未七十年。云々。とある。

(64) 拙稿前出「南宋時代淮南路の通貨問題」。淮南交子の発行計画が、塩専売による収納額と軍俸への支出額とを見合せて練られている。

(65) この形の手形利用は、地方的には早くから行われていた。宋会要食貨三三の三葉所引撫州志の塩課の条に

塩場在州東南。元祐間出会子。与民間請塩。以折和買。崇寧中廢。

とあり、元祐年間(一〇八六—一〇九三)和買の代価を会子で支払い、その会子を官塩の購入に使用せしめて回収していたと云う。